『維摩経』と『智光明荘厳経』

高橋尚夫
大正大学特任教授

論文要旨

大正大学綜合仏教研究所は 1999 年 7 月にポタラ宮所蔵梵文写本調査を許可され、『維摩経』と『智光明荘厳経』を発見し、その影印版を日中共同で出版した。その発見の経緯について簡略に述べ、同じ帙に包まれていた『維摩経』と『智光明荘厳経』の関連について若干の考察を加えた。

一つは、如来の法身について、『智光明荘厳経』の「文殊讃仏法身禮」と『維摩経』「方便品」の第 12 節「如来の身体」、「見阿閦仏品」第 1 節の「如来をどのように見るか」等に列挙される法身の特徴が、共通の理解を示していることについて報告した。と同時に、弘法大師空海による「文殊讃仏法身禮」の方円図について紹介した。

一つは、『維摩経』と『智光明荘厳経』に出る共通の偈頌について、『維摩経』に出る 4 偈頌を『智光明荘厳経』が引用し、5 偈頌に増広した可能性を示唆した。

ただ、共通に維持され膾炙されていた可能性も棄てきれない。

キーワード:『維摩経』『智光明荘厳経』「文殊讃仏法身禮」法身

宜蘭：佛光大學佛教研究中心， 2015年07月，頁031-072

《維摩經》與《智光明莊嚴經》

高橋尚夫
大正大學特任教授

中文摘要

1999 年 7 月大正大學綜合佛教研究所經過許可對布達拉宮所藏的梵文寫本進行調查，發現了《維摩經》與《智光明莊嚴經》，此後由日中共同出版了影印本。本文簡要敘述以上之發現經過，以及對包在同一帙中《維摩經》與《智光明莊嚴經》的關聯性作些許探討。

首先，關於如來法身的問題，分別列舉《智光明莊嚴經》中的〈文殊讚佛法身禮〉與《維摩經》〈方便品〉第 12 節「佛身」、「見阿閦佛品」第 1 節「以何等觀如来」中關於法身特徵的描述，由此推論兩者的共通之處。同時向大家介紹弘法大師空海的〈文殊讚佛法身禮〉方圓圖。

其次，關於《維摩經》與《智光明莊嚴經》共通的偈頌部分，探討了《智光明莊嚴經》有可能引用了《維摩經》的 4 偈並被增廣至 5 偈，但也不排除兩經共同傳承而廣為傳頌的可能性。

關鍵詞：《維摩經》、《智光明莊嚴經》、〈文殊讚佛法身禮〉、法身

Vimalakīrtinirdeśa and *Sarvabuddhaviṣayāvatāra-jñānālokālaṃkāra*

TAKAHASHI, Hisao
Project Professor, Taisho University, JAPAN

Abstract

In July, 1999, the Institute for Comprehensive Studies of Buddhism at Taisho

NTU Digital Library of Buddhist Studies

Keywords: *Vimalakīrtinirdeśa, Sarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra,* "Chapter on Mañjuśrī Praise the Buddha and Homage to the Dharma Body", *dharmakāya*

NTU Digital Library of Buddhist Studies 臺灣大學佛學數位圖書館

一、維摩経発見の経緯について

大正大学綜合仏教研究所（綜仏）は一九九〇年に中国民族宮・中国民族図書館との学術交流事業を締結し、同図書館蔵の梵文写本調査を端緒として、中国各地の仏教文献調査を行なってきた。その一環として一九九七年チベット自治区の学術調査が許可され、一九九九年七月にはチベット・ポタラ宮所蔵サンスクリット文献調査が実現した。しかし、その過程は容易なことではなく、そのすべてを記すことは省略せざるを得ないが、このプロジェクトを推進し、『維摩経』の出版を実現させた四名の先生のお名前だけは記させていただきたい。ご遷化されるまで、文字通り身命を抛って中国との交流を続けていただいた故齋藤光純先生（2002 年 6 月 11 日御遷化）、ポタラ宮文献調査団の団長を務められた松濤誠達先生（元大正大学学長）、困難にも困難な幾多の交渉を重ね出版を実現させた多田孝文先生（前大正大学学長）、すべての調査に参加され写本調査を直接担当された木村高尉先生（「二万五千頌般若経」の梵文テキストを刊行され、現在「十万頌般若経」の校訂に邁進されている）である。まだまだ、多くの先生方のお名前を記さなければならないがお許しいただく。筆者はポタラ宮仏教文献調査団の一員として参加し、たまたま筆者の開いた包みの中に『維摩経』があったというだけに過ぎないがその経緯を簡単に記しておきたい。

ポタラ宮側で作成された目録を呈示され、調査員それぞれが興味のあるところから順次調査に入った。筆者が興味の覚えたものに次の題名が記されていた。

『ポタラ宮所蔵梵文貝葉目録』ポタラ宮管理処　目録番号 39 号 030 号 甘珠尔

① **Āryasarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra nāma mahāyānasūtram**

入一切佛國智明庄嚴大乘經

② **Abhiratiyogabhātvanākṣobhyotothāgatarśana**（ママ）

如来得不動妙楽光明瑜伽星曜経

(これは、後に判ったことであるが『維摩経』第 XI「見阿閦仏品第十二」の章名である

Abhiratilokadhātvānayana Akṣobhyatathāgatadarśanaparivarta ekādaśaḥ //

「アビラティ世界の示現とアクショーブヤ如来」の誤記である。何故これが『維摩経』のタイトルと見做されたのか不明であるが、この章は後に述べる『智光明荘厳経』の「文殊讃仏法身礼」と深い関係を有し、目録制作者の意識の底に『智光明荘厳経』との共通認識があった可能性がある)

筆者は①の経典に興味を引かれ調査を開始したが、続けて調査した②の不思議な経典名が『維摩経』であったというわけである。では、なぜ筆者が①の経典に興味を引かれたのか、そのいきさつについて私情を込めて少しく述べておきたい。

弘法大師空海の詩文集『遍照発揮性霊集』「中寿感興詩并序」の中に次の一文がある。

> 粤有文殊讃仏法身禮四十行頌。文約義周。句句金玉字字圓融。古文云。知命讀易義趣易入。况復四十年歳観五八頌。豈不快哉。達夜循環感通在焉。其文易別深義難解。聊為童矇引而申之以為

一百二十禮兼作方円二図並撰義注。冀令生盲徒頓悟三昧法仏本具我心。二諦真俗倶是常住禽獣卉木皆是法音。安楽覩史本来胸中。

（『遍照発揮性霊集』定本弘法大師全集　第 8 巻 43 頁）

粤に文殊讃仏法身禮四十行の頌有り。文約にして義周し。句句金玉のごとくして字字圓融せり。古文に云く。知命にして易を讀めば義趣入り易し。況んや復た四十年歳にして五八の頌を観ぜん。豈に快よかざらんや。夜も達ら循環して感通焉に在り。其の文別ち易くして深義解り難し。聊か童矇の為に引て之を申べて以て一百二十の禮と為す。兼て方円の二図を作って並に義注を撰す。冀くは生盲の徒をして頓に悟ら令めん。三昧の法仏は本より我が心に具せり。二諦の真俗は倶に是れ常住なり。禽獣卉木皆な是れ法音。安楽覩史は本より来のかた胸中なりということを。

「ここに『文殊讃佛法身礼』という四十行からなる偈頌がある。その文は簡潔であるが意味は非常に深い。その一々の句は金玉のごとくであって、一々の字はお互いに円融して無碍である。古の文に『五十歳となって易経を読めばその義趣は悟りやすい』といっているが、今また、私も四十歳となってこの四十の偈頌を観じてみると、どうしてどうして実に心に響くものがある。夜を徹して繰り返し読んでいるうちに、その意味を感得し通達することが出来た。その文句は解りやすいが、その深い意味はなかなか理解し難いものがある。そこで、いささか若いものたちのために引用してこれを述べてみると、一百二十の礼に収まるのである。そこで、方図と円図の二つを作って、それに註を施すことにした。願わくは愚昧のものたちをして速やかに悟らしめたいものである。三昧に住するところの法身仏はもともと我が心中にあるものであり、真諦も

俗諦も共に常住なものである。それ故、鳥や獣の声も、草木の音も皆是れ説法の声であり、安楽国土も兜率天も本来この胸中に宿っているのである」。

大師が四十歳になられたときに、四十の年齢にちなんで四十の偈頌からなる『文殊讃佛法身礼』を方図と円図の二種の図に作ったとある。そして、この方円図を傳教大師最澄が『釈理趣経』と共に借り出している（「傳教大師消息」傳教大師全集第五巻 p.449）。このうち、『釈理趣経』については弘法大師の傳教大師に対する返書である「叡山の澄法師理趣釈経を求むるに答する書」（『性靈集』所収）があり、最澄と空海の決別の原因となったという有名な問題となっていることは周知のとおりである。筆者はそれよりもこの『文殊讃佛法身礼』の方円図のほうに以前から興味を抱いていた。

この『文殊讃佛法身礼』は具名を『大聖文殊師利菩薩讃佛法身禮』（不空訳：大正 20・936 頁）といい、大師の『御請来目録』に「文殊讃法身礼一巻三紙」とあるのに相当する。そして、これが『智光明荘厳経』すなわち、宋法護等訳『仏説大乗入諸仏境界智光明荘厳經』五巻（大正 No.359 ）のうちの第四巻に出ていることも周知のことである。

この大師が請来された『文殊讃佛法身礼』の出ている『智光明荘厳経』の梵本が、ポタラ宮側から呈示された目録の中に在ったということであり、当然第一番目に飛びついたわけである。虫除けの布に二重三重に包まれた帙の中に、この『智光明荘厳経』の梵本と不思議な題名の梵本が重ねて含まれていたわけで、調査の結果『維摩経』であると判明したということである。まさにお大師さまのお導きがあっての上であると深く銘じている次第である。

二、文殊讃仏法身礼について

次に、『文殊讃佛法身礼』の方円図とはいかなるものか簡単に触れておきたい。周知の如く『智光明荘厳経』の漢訳には

〇曇摩流支訳『如来荘厳智慧光明入一切佛境界経』(大正 No.357)、

〇僧伽婆羅『度一切諸佛境界智厳経』(大正 No.357)、

〇法護等訳『佛説大乗入諸佛境界智光明荘嚴經卷』五巻
(大正 No.359)(以下『智光明荘厳経』)

の三訳があるが、この『文殊讃佛法身礼』は法護等訳の『智光明荘厳経』第四巻(但し第四巻と第五巻は惟浄等訳となっている)に出ており、不空はこの讃佛の偈頌だけ別に訳出している。惟浄等訳は七言絶句で、不空訳は五言絶句で訳され、訳文は全く異なっている。曇摩流支訳には十首ほど残り、一二の文字の相違はあるが不空訳と全く同じである。僧伽婆羅訳には全く欠けている。

この五言絶句で訳されている偈頌の形態を見てみると、サンスクリットの詩形はシュローカ調であり、第四句目(d)はすべて同じで、無所縁なる法身に帰命する句(nirālamba namo 'stu te)で「敬禮無所観」と訳されている。一句目から三句目(a, b, c)迄は法身を讃嘆する句で、サンスクリット文に由れば、呼格(vocative)、あるいは主格 (nominative) の形で現われる。そこで大師は四十首の偈頌の一句目と二句目と三句目、すなわち a, b, c の部分をバラバラにして、一句目 a だけを四十集めて身口意の三密の身密にあて、二句目 b だけを四十集めて口密にあて、三句目 c だけを四十集めて意密にあて、三×四十の都合一百二十の礼図を三種類作成したのである。現在は方円図のうち、円図のみが長谷宝舟編『弘

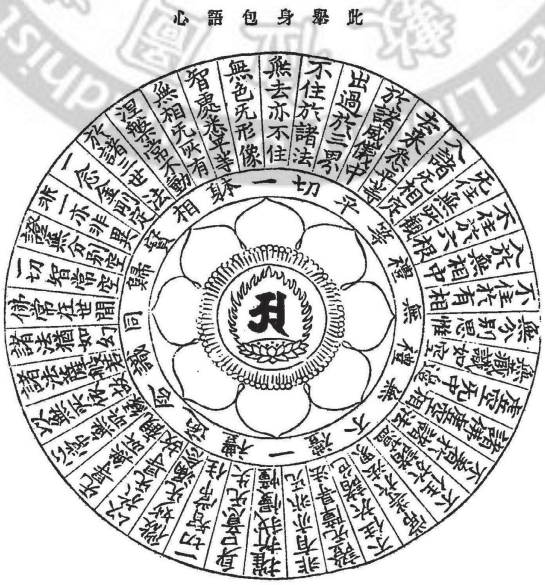
法大師全集』第四輯に収められているが、もとより大師の真作かどうか疑義が呈されており、大師のものではないとされている。ここで取り上げる問題ではないので、今は一応大師のものとしておく。この円図にならって方図（方図がどのようなものであったか、失われた現在、復元することは不可能であるが、恐らく四方に十句ずつを配置したものと思われる。ここでは並列的に一覧表）にしたものを以下示しておきたい。

なお、すでにこの方円図については拙論（「『文殊讃佛法身礼』の方円図について」佐藤良純教授古稀記念論文集：インド文化と仏教思想の基調と展開〈第一巻〉山喜房 2003 年）を提出している。そこでは漢訳に沿って方図を作成したが、ここではサンスクリット文に沿って三つに分解した方図を再編成しておきたい。なお、漢訳は不空訳を用い、ゴシック体にした部分は漢訳の入れ替わっている箇所である。（たとえば、「常在寂静故（sadā samāhitaś cāsi 5a あなたは常に安住し）」と、「於諸威儀中（īryāpatheṣu sarveṣu 5c あらゆる威儀において）」との漢訳は第一句目に「於諸威儀中」が来て、第三句目に「常在寂静故」が来ているということである）

次に、「文殊讃仏法身礼」の一覧表と、『維摩経』「方便品第二」節 12 の法身についての一覧表、「見阿閦仏品第十二」節 1 の如来についての一覧表を挙げておこう。いづれも法身如来とはいかなるものかを列挙したものであり、その内容は酷似している。

法身三密観図 (円図)

『弘法大師全集』第四輯 頁 840-842、846-848



法身語密觀圖

此舉語包身意

法身語密觀圖

此舉語包身意

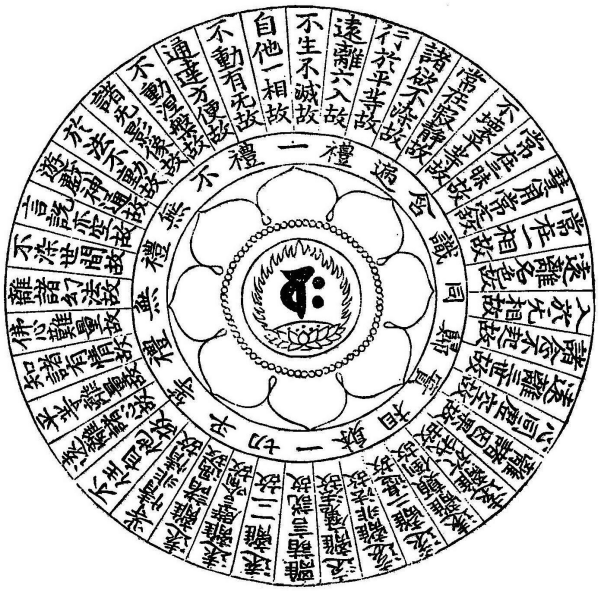
此圖倒置不知何故

圖觀密心身法

此舉心包身語

圖觀密心身法

此舉心包身語



文殊讃仏法身礼一覧表 (方図)

身

一	無色無形相	avarṇaliṅgasaṃsthāna	1a	色も特徴も形態もなく
	不去亦不住	apratiṣṭha anāyūha	2a	基盤なく、持ち来たるものもない
切	不住於諸法	asthita sarvadharmeṣu	3a	あらゆる事象の中に住せず
	出過於三界	traidhātukavinirmukta	4a	三界より自由である
平	**常在寂静故**	**sadā samāhitaś cāsi**	5a	**あなたは常に安住し**
	去來悉平等	samaṃ kṣeṣi samaṃ yāsi	6a	あなたは平等に来、平等に去る
等	**常在三昧故**	**samatāṃ ca samāpannaḥ**	7a	**また、平等性に入り**
	無住無所観	apratiṣṭhita nirālamba	8a	基盤もなく、他に頼ることもい
禮	不住於六根	sarvasattvāna ye rūpā	9a	一切有情の姿形を取るが
	遠離名色故	**nāmarūpavinirmukta**	10a	**名前や姿形より自由になり**
無	不住於有相	nimittāpagataś cāsi	11a	あなたは有相を遠離し
	無分別思惟	avikalpitasaṃkalpa	12a	分別思惟なし
禮	無蔵識如空	anālayaṃ yathākāśaṃ	13a	虚空の如くとは、拠り所なきことであり
	虚空無中邊	anantamadhyam ākāśaṃ	14a	虚空は辺も中もない
無	諸佛虚空相	ākāśalakṣaṇā buddhā	15a	諸仏は虚空を相とし
	如水月無取	**dakacandravad agrāhya**	16a	**水に映った月のように把捉できない**
不	不住於諸蘊	aniśrito ’si skaṇdheṣu	17a	あなたは［五］蘊に依存せず
	遠離二邊故	**antadvayavinirmukta**	18a	**二辺を離れている**
禮	不住於諸色	rūpasaṃkhyāvinirmukta	19a	形あるものの員数より離脱し
	遠離魔法故	**māradoṣasamatikrānto**	20a	**悪魔の罪業を超越している**

一	非有亦非無	astīti nocyate ’rthajñair	21a	義解の方々はあるとも［ないとも］仰らず
	非一亦非二	**dvayadharma aniśritya**	22a	**［あなたは］二つのものに依止しない**
禮	身口意無失	jitās te mānasā doṣāḥ	23a	あなたは心に関する罪過に打ち勝ち
	応現無功用	**anābhogapravṛto ’si**	24a	**あなたは無功用に転じている**
遍	微妙無漏念	anāsravā te smṛtiḥ sūkṣmā	25a	あなたの念は無漏であり、微細であり
	以心無礙故	anārambaṇena cittena	26a	あなたは無所縁なる御心によって［知る］
含	無礙無所観	anārambaṇa anālamba	27a	所縁なく、拠り所なく
	心常無所縁	anārambaṇaṃ ca taccittaṃ	28a	その心は無所縁である
識	以無所依心	aniśritena jñānena	29a	［あなたは］無所依なる智によって
	佛心難測故	**citta na labdhaṃ buddhehi**	30a	**諸仏は心を獲得せず**
同	諸法猶如幻	māyopamāḥ sarvadharmā	31a	あらゆる事象は幻の如くであると
	佛常在世間	loke carasi saṃbuddha	32a	正覺者たるあなたは世間において行じる
歸	一切智常住	śūnye carasi śūnyatvāc	33a	あなたは空たるが故に空において行じ
	遊戯神通故	**vikurvasi mahāridhyā**	34a	**あなたは大神通を以て神變す**
実	非一亦非異	anekatva anānātva	35a	［あなたは］非一性・非多性に［到達している］
	刹那成等覚	**ekakṣaṇe ’bhisaṃbuddha**	36a	**一瞬のうちに悟る**
相	**不動涅槃故**	**acalaṃ vetsi nirvāṇaṃ**	37a	**あなたは不動なる涅槃を知り**
	無此岸彼岸	**pāraṃparyeṇa sattvānām**	38a	**有情たちの展転相続によって**
禮	無相無所有	nirnimitta nirābhoga	39a	無相にして、無功用
	寂静無分別	**nirvikalpo nirātmīya**	40a	**無分別にして無我なり**
	敬禮無所觀	nirālamba namo ’stu te	d	他に頼らない方よ あなたに帰命し奉る

口

一	**不生不滅故**	**anirodha asaṃbhava**	**1b**	**不滅にして不生**
	不取亦不捨	aniyūhānavasthita	2b	捨てるものもなく、住処もない
切	離有離無故	bhāvābhāvavivarjita	3b	存在と非存在を離れ
	等同於虛空	ākāśasamatāṃ gataḥ	4b	虛空のような平等性に到った
平	去來及睡寤	gacchan tiṣṭhan śayann api	5b	行くも止まるも臥すも
	已住於平等	samatāyāṃ pratiṣṭhitaḥ	6b	平等性に安住している
等	見諸法寂靜	sarvadharmasamāhitaḥ	7b	一切の事象に専心し
	慧用常定故	**prajñākūṭasamāhitaḥ**	**8b**	**般若の積集に専心している**
禮	不著於六境	rutaghoṣās tathairyatāḥ	9b	音声、威儀を［現すが］
	能断於諸染	skandhahetusamucchidaḥ	10b	集合体（蘊）の原因を断じている
無	亦離於諸相	nimittakāravarjitaḥ	11b	有相の形を欠き
	心住無所住	apratiṣṭhitamānasa	12b	意を止めることがない
禮	無染無戯論	niḥprapañcam nirañjanam	13b	無戯論にして無垢なること
	諸佛心亦然	buddhānāṃ caiva dharmatā	14b	諸仏の法性もまた同様である
無	虛空亦無相	ākāśañ cāpy alakṣaṇam	15b	虛空はまた相がなく
	不著於諸法	**sarvadharmeṣv aniśritaḥ**	**16b**	**あらゆる事象に依存しない**
不	不著於處界	dhātuṣv āyataneṣu ca	17b	［十二］處、また、［十八］界［に依存しない］
	我見悉皆断	ātmadṛṣṭisamucchidaḥ	18b	我見を断じている
禮	**遠離非法故**	**asaddharmavivarjitaḥ**	**19b**	**正法ならざるものを遠離し**
	通達於諸法	dharmadhātuṃ gatiṃgataḥ	20b	法界に通達している

一	有無不可得	nāstīty api tu nocyate	21b	［あるとも］ないとも仰せにならず
	摧折我慢幢	**mānadhvajasamucchidaḥ**	**22b**	**慢心の幢をうち砕いている**
禮	三業常寂静	śārīrāś ca caturvidhāḥ	23b	身体に関する四種の［病］に打ち勝ち
	遠離諸過故	**sarvadoṣavivarjitaḥ**	**24b**	**一切の罪業を離れている**
遍	無限無分別	bhūtābhūteṣu tanmayā	25b	真実と非真実において、それから成る
	悉知一切心	sarvacittaṃ prajānasi	26b	あらゆる心を知る
含	**遠離諸心故**	**sarvacittāna mohana**	**27b**	**愚癡なるすべての心について**
	自性不可得	svabhāvena na vidyate	28b	自性からして存在しない
識	悉見諸刹土	sarvakṣetrāṇi paśyasi	29b	あなたは一切の国土を観る
	畢竟無所有	atyantāya kadā cana	30b	いかなる時も畢竟じて
同	而幻不可得	māyā caiva na vidyate	31b	また、まさに幻は存在しないと
	而不染世法	lokadharmair aniśritaḥ	32b	世間の事象に依止しない
歸	空性空境界	chūnyatvāc chūnyagocaraḥ	33b	空たるが故に空を境界としている
	得如幻三昧	māyopamasamādhinā	34b	如幻三摩地によって
実	非近亦非遠	dūrāsanne na vartase	35b	あなたは遠と近において動じることなく
	一念金剛定	**vajropamasamādhinā**	**36b**	**金剛喩三昧によって**
相	**於諸三世法**	**sarvatryadhvasu nāyaka**	**37b**	**あらゆる三世における導師よ**
	通達方便故	**upāyajñānakovidaḥ**	**38b**	**方便と智に巧みである**
禮	無患無戯論	niḥprapañca nirāmaya	39b	無戯論にして、無病
	自他一相故	**yathaivātmānam ātmanā**	**40b**	**自ら如実なる自己を［知る］。**
	敬禮無所觀	nirālamba namo ’stu te	d	他に頼らない方よ あなたに帰命し奉る

心

一	**無根無住處**	**amūla apratiṣṭhāna**	**1c**	**根もなく、基盤もない**
	遠離六入故	ṣaḍāyatanavinirmukta	2c	六つの感覚器官より遠離している
切	行於平等故	saṃskārasamatāprāpta	3c	現象の平等性に到達し
	諸欲不染故	nopalepyasi kāmeṣu	4c	あなたは諸々の欲に染められない
平	**於諸威儀中**	**īryāpatheṣu sarveṣu**	**5c**	**あらゆる威儀において**
	不壞平等故	samatāṃ na vikopesi	6c	平等性を掻き乱さない
等	**入諸無相定**	**ānimittasamāpanna**	**7c**	**無相に入っており**
	於法得自在	**dharmaiśvaryam anuprāpta**	**8c**	**法の自在を獲得している**
禮	常在一相故	ekakṣaṇena deśesi	9c	一瞬のうちに示現する
	入於無相中	**anākārapraveśo 'si**	**10c**	**あなたは無相の状態に入ってる**
無	入相於無中	ānimittapraveśo 'si	11c	無相の状態に入り
	諸念不起故	asmṛty amanasīkāra	12c	念なく、作為なし
禮	心同虛空故	ākāśasamacitto 'si	13c	あなたには虛空に等しき心あり
	遠離三世故	tryadhvasamatikrānta	14c	三世を超越し
無	離諸因果故	kāryakāraṇanirmukta	15c	因果を離脱し
	遠離於我相	anahaṃkāra anirghoṣa	16c	我執なく、音声なし
不	遠離顛倒故	viparyāsavinirmukta	17c	顛倒より離脱し
	常等於法界	**dharmadhātusamatāprāpta**	**18c**	**法界の平等性に到達している**
禮	**非取亦非捨**	**anupādāna atyāga**	**19c**	**取るものもなく捨てるものもない**
	證無障礙法	**anāvaraṇadharmo 'si**	**20c**	**無障礙の法を有している**

一	離諸言説故	avākpatha anādāna	21c	言語道もなく、攝受もなく
	離遠一二故	dvayādvayavinirmukta	22c	二と不二とを離脱している
禮	遠離譬喩故	acintya vigataupamya	23c	不可思議で、比較を離れている
	一切智常住	**jñānapūrvaṅgamā ceṣtā**	**24c**	**行動は智を先としている**
遍	等情非情故	aniketa asaṃkalpa	25c	住処なく、分別なく
	不住自他故	na cātmaparasaṃjñā te	26c	また、あなたには自他の思いがない
含	**常住無礙法**	**anārambaṇadharmo 'si**	**27c**	**あなたは無所縁の法を有し**
	平等難量故	acintya samatāprāpta	28c	不可思議にして、平等に到達している
識	知諸有情故	sarvasattvacariṃ caiva	29c	また、一切衆生の行為を観て
	諸法薩婆若	**sarvadharmā ca sarvajña**	**30c**	**また、すべての事象を知ってる**
同	離諸幻法故	māyādharmavinirmukta	31c	幻の事象を離脱し
	不分別世間	lokaṃ na ca vikalpesi	32c	また、あなたは世間を分別しない
歸	言説亦空故	śūnyaṃ ca śūnyam ākhyāsi	33c	あなたは空を空であると説き
	證無分別定	**nirnānātvaṃ samāpanna**	**34c**	**無差別性に到達している**
実	於法不動故	anutkṣepa anikṣepa	35c	高下無く
	證無影像故	nirābhāsasamāpanna	36c	無顕現に到達している
相	**成就諸方便**	**vividhopāyasampanna**	**37c**	**種々の方便を具えている**
	涅槃常不動	**acalaṃ vetsi nirvāṇaṃ**	**38c**	**あなたは不動の涅槃を知る**
禮	不住有無故	nirābhāsa nirātmaika	39c	無顕現にして、無我であり
	智處悉平等	**vetsi sarvajña sarvatra**	**40c**	**あなたはすべてにおいてすべてを知る**
	敬禮無所觀	nirālamba namo 'stu te	d	他に頼らない方よ あなたに帰命し奉る

『維摩経』II-12「方便品第二」節 12 **如来の身体**

（梵漢対照、蔵割愛）

	サンスクリット	支謙	羅什	玄奘
	dharmakāyo hi tathāgatakāyaḥ 如来のお身体とは法身であり、	—	佛身者即法身也	如来身者 [無量善法共所集成]25
	—	1 佛法身者從福祐生 2 佛身者從智生	1 從無量功德智慧生	1 從修無量殊勝福德・智慧所生
1	dānanirjātaḥ 施より生じ、	—	—	—
2	śīla° 戒より生じ、	3 從戒品・	2 從戒・	2 從修無量勝戒・
3	samādhi° 定（三昧）より生じ、	定品・	定・	定・
4	prajñā° 智慧より生じ、	慧品・	慧・	慧・
5	vimukti° 解脱より生じ、	解品・	解脱・	解脱・
6	vimuktijñānadarśama° 解脱知見より生じ、	度知見品生	解脱知見生	解脱知見所生
7	maitrīkaruṇāmuditopekṣā° 慈・悲・喜・捨より生じ、	4 從慈・悲・喜・護生	3 從慈・悲・喜・捨生	3 從修慈・悲・喜・捨所生
8	dānadamasaṃyama° 布施・調伏・抑制より生じ、	5 從布施・調意・自損生	4 從布施・持戒・	4 從修布施・調伏・寂靜・戒・
9	kṣāntisauratya° 忍耐・柔和より生じ、	6 從忍辱・仁愛・柔和生	忍辱・柔和・	忍・
10	dṛḍhavīryakuśalamūla° 堅固な精進の善根より生じ、	7 從強行精進功德生	勤行精進・	精進・
11	dhyānavimokṣasamādhisamā-patti° ［四］禅定・［八］解脱・［三］三昧・［四］等至より生じ、	8 從 禪・解・定・意・正受生	禪定・解脱・三昧・	靜慮・解脱・等持・
12	śrutaprajñopāya° 聞・慧・方便より生じ、	9 從智度無極・聞德生 10從善權方便・智謀生	多聞・智慧・[諸波羅生] → 18 5 從方便生	等至・般若・方便・願力・智生
13	saptatriṃśadbodhi-pakṣya° 三十七菩提分より生じ、	12從三十七道品生	8 從三十七道品生	8 修三十七菩提分生
14	śamathavidarśanā° 止・観より生じ、	14從止觀生	9 從止觀生	9 修止觀生

15	daśabala° 十力より生じ、	15從十力生	10從十力・	10從修十力・
16	caturvaiśāradya° 四無畏より生じ、	16從四無所畏生	四無所畏・	四無畏生
17	aṣṭādaśāveṇikabuddhadharma° 十八不共仏法より生じ、	17從佛十八法生	十八不共法生	11從修十八不共法生
18	sarvapāramitā° 一切の波羅蜜より生じ、	11從一切諸度無極生	[諸波羅蜜生]	5 從修一切到彼岸生
19	abhijñāvidyā° ［六］神通・［三］明より生じ、	13從神通生	6 從六通生 7 從三明生	6 修六通生 7 修三明生
20	sarvākuśaladharmaprahāṇāya° あらゆる不善法を断じることより生じ、	18從斷一切惡法生	11從斷一切不善法・	12從斷一切不善法・
21	sarvakuśaladharmaparigraha° あらゆる善法を掌握することより生じ、	19從一切善法合會生	集一切善法生	集一切善法生
22	satya°　　諦（真理）より生じ、	20從諦生	12從眞・	13從修諦・
23	bhūta°　　真実より生じ、	21從誠生	實生	實・
24	apramāda° 不放逸より生じます。	―	13 從不放逸生	不放逸生
25	apramāṇaśubhakarmanirjāto tathāgatakāyaḥ 如来のお身体は無量の善業より生じます	21不可計清淨行爲成如來身。	14從如是無量清淨法生如來身。	14從修無量清淨業生 [無量善法共所集成]

『維摩経』XI-1「見阿閦品第十二」節 1 **どのように如来を見るのか**

（梵漢対照、蔵割愛）

	サンスクリット	支謙	羅什	玄奘
1	rūpatathatāsvabhāvam arūpam, 色（形相）の真如を自性としながら、色ではない。	空種是同入無所積。	不觀色不觀色如。不觀色性。	我觀如來色眞如性。 其性非色受眞如性。
2	vedanātathatāsvabhāvam avedanām, 受（感受）の真如を自性としながら、受ではない。		不觀受想行識。 不觀識如。 不觀識性。	其性非受想眞如性。 其性非想行眞如性。 其性非行識眞如性。 其性非識。
3	saṃjñātathatāsvabhāvam asaṃjñam, 想（想念）の真如を自性としながら、想ではない。			
4	saṃskāratathatāsvabhāvam asaṃskāram, 行（意志）の真如を自性としながら、行ではない。			
5	vijñānatathatāsvabhāvam avijñānam, 識（認識作用）の真如を自性としながら、識ではない。			
6	caturdhātvasaṃprāptam ākāśa-dhātusamam, 四（大）界から成り立っておらず、虚空界に等しい。		非四大起。 同於虛空。	不住四界。 同虛空界。
7	ṣaḍāyatanānutpannaṃ cakṣuḥ-pathasamatikrāntam śrotra-ghrāṇa-° jihvā-° kāya-° manaḥ-pathasamatikrāntam, 六処に生じたものでなく、眼の道を超えており、耳の道を超えており、鼻の道を超えており、舌の道を超えており、身の道を超えており、意の道を超えている。	眼耳鼻口身心。 以離	六入無積。 眼耳鼻舌身心已過	非六處起。 超六根路。
8	traidhātukāsaṃsṛṣṭam, 三界（欲界・色界・無色界）に染まらない。	三界不疲。	不在三界。	不雜三界。
9	trimalāpagatam, 三垢（貪・瞋・痴）を離れている。	―	三垢已離	遠離三垢。
10	trivimokṣānugatam, 三解脱に随順している。	解三脱門	順三脱門。	順三解脱。

11	trividyānuprāptam, 三明を獲得している。	得三達智。	具足三明與無明等。	隨至三明。
12	aprāptam saṃprāptam, 獲得しないままで、 獲得している。	爲無所至至一切法。	—	非明而明 非至而至。
13	sarvadharmeṣv asaṅgakoṭīgataṃ bhūtakoṭyakoṭikam, 一切諸法において無執着の辺際に到達しながら、真実際を辺際としない。	得無礙立積於誠信。如無所住	—	至一切法無障礙際。 實際非際。
14	tathatāpratiṣṭhitaṃ tadanyonya-visaṃyuktam, 真如に住しながら、それと互いに離れている。	如慧無雜眞如非如。	—	非眞非如。 於眞如境常無所住。 於眞如智恒不明應。 眞如境智其性俱離。
15	na hetujanitaṃ na pratyayā-dhīnam, 因から生じたものでなく、 縁に拠るものでもない。	不生因縁。	—	非因所生 非縁所起。
16	na vilakṣaṇaṃ na salakṣaṇam, 離相でなく、有相でない。			非有相 非無相。
17	naikalakṣaṇaṃ na nānālakṣaṇam / 一相でなく、種々相でもない。	不一相 不非相。	不一相不異相。	非一相非異相。
18	na lakṣyate na saṃlakṣyate ma vilakṣyate, 特徴づけられず、知覚されず、 まったく認識されない。	不無視。 不爲視。 不熟視。 不暫視。	不自相不他相。 非無相非取相。	非即所相非離所相。 非同所相非異所相。 非即能相非離能相。 非同能相非異能相。
19	nārvāṅ na pāre na madhye, こちら岸になく、 あちら岸にもなく、 〔その〕中間にもない。	不此岸 不度汎 不中流。	不此岸不彼岸不中流。 而化衆生。觀於寂滅亦不永滅。	非此岸 非彼岸 非中流。
20	neha na tatra, ここにもなく、そこにもない。	不以此不以彼	不此不彼。	非在此非在彼非中間。
21	neto nānyataḥ, こちらにもなく、 あちらにもない。	不以異。	不以此不以彼。	非内非外非俱不俱。
				非已去・非當去 非今去。
				非已來・非當來 非今來。

22	na jñānavijñeyo na vijñānapratiṣṭhitaḥ, 智の知るところでなく、 認識に拠るものでない。	不解慧 不住識。	不可以智知。 不可以識識。	非智非境。非能識 非所識。非隱非顯。
23	atamo ’prakāśaḥ, 闇でなく、光でない。	無晦 無明	無晦 無明	非闇 非明。
				無住無去。
24	anāmānimittam 名称もなく、特徴(しるし)もない。	無顯 無名	無名 無相。	無名 無相。
25	na durbalo na balavān 力がないものでなく、 力があるものでもない。	無弱 無強。	無強 無弱	無強 無弱
26	na deśastho na pradeśasthaḥ (*nādeśasthaḥ* ？) この場所にあるのでなく、 別の場所にあるのでもない。	無教 無不教。	不在方 不離方。	不住方分 不離方分。
27	na śubho nāśubhaḥ, 浄でなく、不浄でもない。	無淨 無不淨。	非淨非穢。	非雜染 非清淨。
28	na saṃskṛto nāsaṃskṛtaḥ / 有為でもなく、無為でもない。	無數 無不數。	非有爲 非無爲。	非有爲 非無爲。
				非永寂滅 非不寂滅。
29	nāpi kenacid arthena vacanīyaḥ, ① na dānato na mātsaryataḥ, ② na śīlato na dauḥśīlyataḥ, ③ na kṣāntito na vyāpādataḥ, ④ na vīryato na kausīdyataḥ, ⑤ na dhyānato na vikṣepataḥ, ⑥ na prajñāto na dauḥprajñyataḥ, na vacanīyo 〔また、如来は〕なんらかの意味によって語られるべきものではない。〔すなわち、〕 ①布施としても、慳悋としても、 ②戒としても、破戒としても、 ③忍としても、逼迫としても、 ④精進としても、怠惰としても、 ⑤禅定としても、散乱としても、 ⑥慧（般若）としても、悪慧としても、〔如来は〕語られるべきではない。	無言無不言。 不施不受。 不戒不犯。 不忍不諍。 不進不怠。 不禪不亂。 不智不愚。	無示無説。 不施不慳。 不戒不犯。 不忍不恚。 不進不怠。 不定不亂。 不智不愚。	無少事可示。 無少義可説。 無施無慳。 無戒無犯。 無忍無恚。 無勤無怠。 無定無亂。 無慧無愚。

30	nāvacanīyaḥ, na satyato na mṛṣātaḥ, na nairyāṇikato nānairyāṇikataḥ/ 〔また、如来は〕語られるべきでないのでもない。〔すなわち、〕真実として、虚偽として、出離として、不出離として〔、語られるべきでないのでもない〕。	不誠不欺。不出不入	不誠不欺。不來不去。	無諦無忘。無出無入。
31	na gamanīyo nāgamanīyaḥ, 〔如来は〕行くものでなく、来るものでもない。	不往不反。	不出不入。	無去無來。
32	sarvarutavyāhārasamucchinnaḥ, あらゆる音声や言説を断っている。	斷諸雜聲。	一切言語道斷。	一切語言施爲斷滅。
33	na kṣetrabhūto nākṣetrabhūtaḥ, 福田でなく、福田でないのでもない。	非有土非無土。	非福田非不福田。	非福田非不福田。
34	na dakṣiṇārho na dakṣiṇāśodhayitā, 供養に応じるものでなく、供養に応じないものでもない。	非有餘	非應供養非不應供養。	非應供非不應供。
35	agrāhyaḥ, 把握されない。	非盡嘶	非取	非能執非所執。
36	aparāmṛṣṭaḥ, 触れられない。		非捨。	非能取非所取。
37	aniketaḥ, 標(しるし)づけられない。	非模	非有相	非相非不相。
38	asaṃskṛtaḥ, 作られない。	非想	非無相。	非爲非不爲。
39	saṃkhyāpagataḥ, 数量を離れている。	非著捨著。	—	無數離諸數。無礙離諸礙。無增無減。
40	samatayā samaḥ, 平等性のゆえに平等である。	平等正法。	同眞際	平等平等。同眞實際。
41	dharmatayā tulyaḥ, 法性と同等である。		等法性。	等法界性。
42	atulyavīryaḥ, 無敵の力がある。	非量	不可稱不可量。	非能稱非所稱超諸稱性。
43	tulanāsamatikrāntaḥ, 計量を超えている。	非稱非過	過諸稱量。	非能量非所量超諸量性。

44	na krānto na cākrāntaḥ, 至ったものでなく、 至らないものでもない。	非逝非作。	非大非小。	無向無背超諸向背。 無勇無怯超諸勇怯。 非大非小非廣非狹。
45	na samatikrāntaḥ, 超えられるものでない。			
46	na dṛṣṭaśrutaparijñātaḥ, 見たり、聞いたり、 知られたりするものでない。	非見非聞。 非意非識。	非見非聞 非覺非知。	無見無聞 無覺無知。
47	sarvagranthivigataḥ, 一切の束縛を離れている。	度諸所生	離衆結縛。	離諸繫縛 蕭然解脱。
48	sarvajñajñānasamatāprāptaḥ, 一切智者の智との平等性に 到達している。	正至諸慧。	等諸智	證會一切智智平等。
49	sarvasatvasamaḥ, 一切衆生と等しい。	等諸人物	同衆生。	獲得一切有情無二。
50	sarvadharmanirviśeṣaprāptaḥ 一切法 (あらゆる存在) の 無差別に到達している。	説一切法。無所 生無所有。	於諸法無分別。	逮於諸法無差別性。
51	sarvato ’navadyaḥ, あらゆる点で、 非難すべきものがない。	—	—	—
52	niṣkiṃcanaḥ, なにものをももたない。	無罣礙。	一切無失。	周遍一切無罪無僣
53	niṣkaṣāyaḥ, 穢(けが)れがない。	一切受無不樂 作。	無濁	無濁無穢
54	niṣkalaḥ, 欠けたものがない。	無刺	無惱。	無所礙著。
55	nirvikalpaḥ, 分別がない。	無擊	—	離諸分別
56	akṛtaḥ, 作用がない。	無滅	無作	無作
57	ajātaḥ, 生まれたものでない。	無敗	無生	無生。 無虚・無實
58	anutpannaḥ, 生起したものでない。	—	無起	無起
59	abhūtaḥ, 〔過去に〕あったものでない。	—	*	—

60	asaṃbhūtaḥ, 〔現在に〕あるものでない。	—	＊	無盡。
61	na bhaviṣyati, 〔未来に〕あろうものでない。	無固。	＊ 無滅。	無曾無當
62	nirbhayaḥ, 畏れがない。	無畏	無畏	無怖
63	niṣkleśaḥ, 煩悩がない。	—	—	無染。
64	niḥśokaḥ, 憂いがない。	無憂	無憂	無憂
65	niṣprītikaḥ, 歓喜がない。	無喜	無喜	無喜
66	nirūrmikaḥ, 波がない。	無聲。	無厭無著。 ＊無已有無當有 無今有	無厭無欣。
67	sarvavyavahāranirdeśair avacanīyaḥ / 〔以上のように〕あらゆる言説の説示によって語られるものではありません。	一切滅説無語。	不可以一切言説分別顯示。	一切分別所不能縁。 一切名言所不能説。

三、「文殊讃仏法身礼方円図」についての結び

この四句からなる偈頌をバラバラにしてひとまとめにするという発想は一体どこから来るのであろうか。もとよりサンスクリット文と漢訳とでは構文が相違するので多少の句句の入れ替わりが存在するが不思議と意味は通じる。もっともこの詩文の一句一句は虚空、無相、平等、無為、無所縁、無碍、無効用など如来を讃嘆する句にみちあふれており、ある意味で一句で独立した形になっているので、並び替えても意味に支障はきたさなくなっている。但だそれを一瞬のうちに見抜き、身口意の三密、あるいは仏蓮金の三部に配当し、禮拜という実践修行を通して愚昧のものに仏性を悟らしめようとした大師の炯眼に大慈悲の心を見るのである。

この作業を通して思い出されるのはやはり大師の作である「十喩の詩」の中の旋火輪の譬えである。

「詠旋火輪喩」（『遍照発揮性霊集』定本弘法大師全集第 8 巻 211 頁）

火輪隨手法與圓　　火輪手に随って方と円となり

種種變形任意遷　　種々の変形は意に任せて遷る

一種阿字多旋轉　　一種の阿字旋転多し

無邊法義因茲宣　　無辺の法義茲に因って宣ぶ

火輪 (火縄) を手に持って是を四角に振れば方火輪となり、丸く振れば円火輪となる。そのように種々の形は意のままに変えることができる。そのように、阿字一字が無数に転じることによって無辺の法門の意味を宣べることができるのである。

一般に旋火輪の喩えは、すべての現象（sarvadharma- 一切諸法）は無自性・空であることを表わす遮情の法門として捉えるが、真言密教においては『大日経』に「当に法財を具足して種々の工巧大智を出生し、実の如く遍く一切の心想を知ることを得べし」(大正蔵 18・4 頁上) とあるように、無自性・空なるが故にそこに無限の働きが展開し、己の心の有り様によってあらゆる現象の中に真実を見るという表徳の法門として捉えるのである。しかもそれらすべての現象は法身たる阿字の一切諸法本不生の理が働いていると見るのである。このように見るとき、『文殊讃仏法身礼』の偈頌もその一句一句が任運無効用に働いていると言ってよいであろう。

四、『維摩経』と『智光明荘厳経』にでる共通の偈頌について

次に『維摩経』と『智光明荘厳経』に共通して出てくる偈頌を紹介しよう。『維摩経』のは「佛國品」第一に出るもので、リッチャヴィの青年宝蔵（Ratnāka

NTU Digital Library of Buddhist Studies 國立臺灣大學佛學數位圖書館

略号

「維摩」『梵文維摩経―ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂―』 大正大学出版会　平成18年

Vimalakīrtinirdeśam Chapter I Buddhakṣetrapariśuddhinidānaparivartaḥ prathamaḥ //

羅什訳『維摩詰所説経』佛國品　第一

「智光明」梵文校訂『智光明荘厳経』小野塚幾澄博士古稀記念論文集　平成16年

Āryasarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra nāma mahāyānasūtram Chapter V

惟淨等訳『佛説大乘入諸佛境界智光明莊嚴經卷』第五

高崎訳　高崎直道訳『如来蔵系経典』（大乗仏典 12）中央公論社　1975

大鹿訳　『維摩経の研究』平楽寺書店　1988

岩松氏　岩松淺夫「梵文維摩経偈頌攷正（1）」創価大学人文論集　第19号　平成19年

Āryasarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra nāma mahāyānasūtram Chapter V	Vimalakīrtinirdeśam Chapter I Buddhakṣetrapariśuddhinidānaparivartaḥ prathamaḥ //
佛説大乘入諸佛境界智光明莊嚴經卷第五 惟淨等奉　詔譯	維摩詰所説経 佛國品　第一

1

vandāmi tvāṃ daśabala oghatīrṇaṃ	vandāmi tvāṃ daśabala satyavikramaṃ
vandāmi tvāṃ abhayadadaṃ viśāradam /	vandāmi tvām abhayagataṃ viśāradam /
dharmeṣu āveṇikaniścayaṃ gataṃ	dharmeṣu āveṇikaniścayaṃ gataṃ
vandāmi tvāṃ sarvajagasya nāyakam // §38-1 //	vandāmi tvāṃ sarvajagatpraṇāyakam // I-§10-12 //
十力があり、激流を渡ったあなたに私は頂礼いたします	十力があり、真に勇者たるあなたに私は頂礼いたします
施無畏者にして無畏者たるあなたに私は頂礼いたします	畏れを離れた無畏者たるあなたに私は頂礼いたします
諸法における〔十八の〕不共法を確定した	諸法における〔十八の〕不共法を確定した
一切世間の指導者たるあなたに私は頂礼いたします	一切世間の指導者たるあなたに私は頂礼いたします

稽首十力度煩惱　稽首廣大施無畏

善住不共諸法中　稽首世間尊勝者（惟淨）

十力、煩惱を度するに稽首す

廣大に無畏を施せるに稽首す

善く不共の諸法中に住する

世間の尊勝者に稽首す

稽首十力大精進　稽首已得無所畏

稽首住於不共法　稽首一切大導師（羅什）

十力の大精進を稽首す

已に無所畏を得たまえるを稽首す

不共の法に住したまえるを稽首す

一切の大導師なることを稽首す

稽首十力諦勇猛　稽首已得無怖畏

稽首至定不共法　稽首一切大導師（玄奘）

十力、諦勇猛なるに稽首す

已に無怖畏を得たるに稽首す

不共の法に至定なるに稽首す

一切の大導師なるに稽首す

チベット訳『智光妙荘厳経』§38

/ stobs bcu chu bo rgal ba khyod la phyag ’tshal lo /

/ ’jigs bral ’jigs med stsol ba khyod la phyag ’tshal lo /

/ ma ’dres chos rnams ñes par thugs su chud gyur pa /

/ ’gro ba kun gyi ’dren pa khyod la phyag ’tshal lo // 1 //

十力（をそなえ、）流れを渡ったかたよ、あなたに帰命する。

恐怖心を離れ、おそれなくつとめるかたよ、あなたに帰命する。

他と共通しない（独自の）諸法を確実にさとったかたよ、あなたに帰命する。

あらゆる（輪廻の）道にあるものの導師よ、あなたに帰命する。（高崎訳）

チベット訳『維摩経』

/ stobs bcu ’dren pa’i rtsal mṅa’ khyod la phyag ’tshal lo /

/ ’jigs pa mi mṅa’ ’jigs bral khyod la phyag ’tshal lo /

/ ma ’dres pa yi chos rnams ñes par rab rtogs pa /

/ ’gro ba thams cad ’dren pa khyod la phyag ’tshal lo // 12 //

私は帰命する　衆生を開導する精進の十力に

私は帰依する　怖畏はなく　怖畏を離れたお方に

私は稽首する　不共仏法一向通達者

一切群生の開導師である汝に（大鹿訳）

【註記】

1a 智光明では、oghatīrṇa-, Tib. chu bo rgal ba,　惟。度煩惱

維摩では、satyavikrama-, Tib. ’dren pa’i rtsal mṅa’, 什。大精進、奘。諦勇猛

とある。維摩のチベット訳は「開導する能力のある」という意味であるが、rtsal mṅa' は、vikrama の訳であろう。
’dren pa はひょっとしたら、発音が同じ bden pa (satya) の可能性もある。

1b 智光明　abhayadada-, Tib. 'jigs med stsol ba,

惟。施無畏　viśārada-, Tib. ’jigs bral, 惟。広大とある。漢訳の広大は viśārada- を viśāla- の意に取った可能性がある。維摩の abhayagata- は Tib. ’jigs pa mi mṅa’、viśārada- は Tib. ’jigs bral が当たる。漢訳は、什。已得無所畏、牂。已得無怖畏、とあり、abhayagata- の訳のみのようである。

1c　dharmeṣu āveṇikaniścayaṃ は āvenikadharmeṣu niścayaṃ の意味であることは明白である。智光明の Tib. は、ṅes par thugs su chud gyur pa とあり、-niścayam adhigatam とでもあったのだろうか。-niścayaṃ gataṃ を惟。は善住と訳す。維摩の漢訳、什。稽首住、牂。稽首至定、とあり、稽首の語を補う。牂。の至定は、至は gata-、定は niścaya- を訳したものであろう。岩松氏は、dharmeṣu āveṇikaniścayaṃ gataṃ を dharmeṣu āveṇika niścayaṃgataṃ と訂正している。

1d　維摩の sarvajagatpraṇāyaka- は、什。、牂。共に「一切大導師」と訳し、jagat（世間）の語を訳していない。
智光明は、sarvajagasya nāyaka- とする。sarvajagato(sg.gen.) nāyaka- では、韻律が不調となるので、sarvajaga- を語幹としたのであろう。Tib. は、智光明では、’gro ba kun gyi と属格の語尾を取り、維摩は、'g

2

vandāmi saṃyojanabandhanacchidaṃ

vandāmi tvāṃ pāragataṃ sthule sthitam /

vandāmi tvāṃ khinnajagasya nāyakaṃ

vandāmi sansāragata-ṃ-aniśritam // §38-2 //

結合の縛を断じたお方に私は頂礼いたします

彼岸に到達し、大地に立てるあなたに私は
頂礼いたします
疲弊したる世間の指導者たるあなたに私は
頂礼いたします
輪廻に至るもそれに依止せざるお方に私は
頂礼いたします

稽首能斷衆結縛　稽首已住於彼岸

稽首救世諸苦尊　稽首不住於生死（惟淨）

能く衆の結縛を断ずるに稽首す

已に彼岸に住するに稽首す

世の諸苦を救する尊に稽首す

生死に住せざるに稽首す

/ kun sbyor ’chiṅ ba bcad pa khyod la phyag ’tshal lo /

/ pha rol byon te thaṅ la bshugs la phyag ’tshal lo /

/ skye bo ṅal ba’i rnam ’dren khyod la phyag ’tshal lo /

vandāmi saṃyojanabandhanacchidaṃ

vandāmi tvāṃ pāragataṃ sthale sthitam /

vandāmi khinnasya janasya tārakaṃ

vandāmi saṃsāragatāv aniśritam // I-§10-13 //

〔輪廻に〕結びつける束縛を断ち切ったお方に
私は頂礼いたします
彼岸に至り、そこに立てるあなたに私は
頂礼いたします
疲弊した人の渡し守であるお方に私は
頂礼いたします。
輪廻の道にとどまらないお方に私は
頂礼いたします

稽首能斷衆結縛　稽首已到於彼岸

稽首能度諸世間　稽首永離生死道（羅什）

能く衆の結縛を断じたまえるを稽首し

已に彼岸に到りたまえるを稽首し

能く諸の世間を度したまえるを稽首し

永く生死の道を離れたまえるを稽首す

稽首能斷衆結縛　稽首已住於彼岸

稽首普濟苦群生　稽首不依生死趣（玄奘）

能く衆の結縛を断ずるに稽首す

已に彼岸に住するに稽首す

苦の群生を普済するに稽首す

生死の趣に依らざるに稽首す

/ kun tu sbyor ba’i bciṅs pa gcod la phyag ’tshal lo /

/ pha rol phyin nas skam la bshugs la phyag ’tshal lo /

/ dub pa’i ’gro ba sgrol ba khyod la phyag ’tshal lo /

/ ’khor bar gśegs śiṅ mi gnas pa la phyag ’tshal lo // 2 //

（心の）束縛を断じたるかたよ、
あなたに帰命する。
彼岸に到達し、地をふんだかたよ、
あなたに帰命する。
怠惰な衆生を導かれるかたよ、
あなたに帰命する。
生死輪廻にはいって、
しかも（そこに）とどまらないかたよ、
あなたに帰命する。（高崎訳）

/ ’khor ba’i ’gro bar mi gnas pa la phyag ’tshal lo // 13 //

私は帰命する　軛の繋縛の断絶者に

私は帰依する　彼岸に達しそこに
安住するお方に
私は稽首する　苦趣を渡りおえた　汝に

私は頂礼する　生死の六趣に住しないお方に
（大鹿訳）

【註記】

2b　智光明の sth*u*le は、写本には sthūle とある。「粗大」の意味から大地の意味にもとれるかと思い、韻律の上から sth*u*le としたが、維摩に sthale とあり、sthale に改めたい。チベット語の thaṅ も skam も「地」の意味で同じである。漢訳では、惟。「已住於彼岸」、什。「已到於彼岸」、弈。「已住於彼岸」とあり、いずれも訳されていないようである。

2c　智光明と維摩とでは単語が相違している。智光明の khinnajagasya は khinnajagato（jagat の sg.gen.）とありたいが、韻律の関係で jaga- を語幹としている。nāyaka- は、チベット語では ’dren とあり、漢訳惟。「救世諸苦尊」の尊の語が当たるであろう。維摩では、khinnasya janasya とし、jaga- を jana- とし、khinna- を分書する。什。は「諸世間」、弈。は「苦群生」と訳す。什。の世間は jaga-、弈。の群生は jana- に相当する。什。には jaga- とあったものか。tāraka- は、チベット語に sgrol ba とあり、什。の「能度」、弈の「普濟」が当たる。智光明とは明確な区別が見られる。

2d　智光明の sansāragata-ṃ-aṇiśrita- は、写本のままである。アヌスヴァーラ (ṃ) は gata の韻律を整えるために挿入されたと考え、aniśrita- と合成

語にした。維摩の saṃsāragatāv は、写本には saṃsāragatāc とあるが、ca は va の写誤と見なした。なお、aniśrita- を、惟。は「不住」、牂。は「不依」と訳し、什。は「永離」と訳す。

3

vandāmi sattvasamādhānavigataṃ｛gatīṣu｝
sarvāsu jātīsu vimuktamānasam /
jaleruhaṃ vā salilair na lipyase
niṣevitā te munir buddha śūnyatā //§38-3 //

諸趣において〔住しつつ〕、
衆生の思いを離れ
あらゆる生に於て意を離脱したお方に私は
頂礼いたします
水に生じるもの（蓮華）の如く、あなたは
水に汚されない
牟尼よ、佛陀よ、あなたは空性を
実践しておられます

sattvair samādhānagataṃ gatīgataṃ
gatīṣu sarvāsu vimuktamānasam /
jaleruhaṃ vā salile na lipyase
niṣevitā te munipadma śūnyatā // I-§10-14 //

衆生たちとともに、〔輪廻の〕道を歩み、
すべての
道において心が解脱しているお方に〔私は
頂礼いたします〕
蓮花のような聖者よ、蓮花が水に
汚されないように
あなたは空性を実践しておられます

普遍通達衆生行　於一切處離意念
如蓮不著於水中　淨空寂默常親近（惟淨）
普遍に衆生行に通達し
一切處に於て意念を離れ
蓮の如く水中に著かず
淨空寂默なるに常に親近す

悉知衆生來去相　善於諸法得解脱
不著世間如蓮華　常善入於空寂行 (羅什)
悉く衆生來去の相を知り
善く諸法に於て解脱を得たまえり
世間に著せざること蓮華の如し
常に善く空寂の行に入り

已到有情平等趣　善於諸趣心解脱
牟尼如是善修空　猶如蓮花不著水 (玄奘)
已に有情の平等の趣に到る
善く諸法に於て心解脱す

牟尼は是の如く善く空を修す
猶お、蓮花の、水に著せざるが如し。

/ 'gro ba thams cad dag na sems can rnams daṅ ni /
/ thabs cig bshugs kyaṅ thugs yid rab tu dben gyur pa /
/ ji ltar pad ma chab kyis gos par mi 'gyur shiṅ /
/ saṅs rgyas thub pa khyod kyis stoṅ ñid śin tu bsten // 3 //

あらゆる（輪廻の）道にあって、衆生たちと、
一緒に往みつつも、心はひとり離れている。
あたかも蓮華が水によって汚染されないごとく、
仏、牟尼たるあなたは、空性による。（高崎訳）

/ sems can rnams daṅ 'gro bar bshugs śiṅ kun 'grogs kyaṅ /
/ 'gro ba thams cad las ni rnam par grol ba'i thugs /
/ pad ma dag ni chu skyes chu yis yoṅ mi gos /
/ thub pa'i pad mas stoṅ pa ñid ni ṅes par bsgoms // 14 //

生死の趣に住して　衆生に親近しながら
心意はよく一切の諸趣から解脱すること
蓮華の汚水に生じて　水に汚染しないごとく
牟尼の蓮華　空性を修習したもう（大鹿訳）

【註記】

3a　このパダは智光明、維摩とも難解で判然としない。維摩では動詞がなく、当然 vandāmi を補って解釈した。智光明では、vandāmi を挿入しているが、漢訳にもチベット訳にもなく、サンスクリット写本の書写者が補ったものかもしれない。そのためか、詩形を著しく損なっている。維摩の sattvair は、写本には sattvai とあり、instr.pl.m. に訂正した。校訂本の -ir は -iḥ のミスタイプである。sattvaiḥ に改めたい。また、岩松氏のご指摘のように、sattve の方がよりよいかもしれない。智光明は、-vigataṃ を始め、このパダは不明である。維摩の gatīgata- は什。「悉知衆生來去相」の悉知によれば gatiṃgata- の可能性がある。

3b　智光明の sarvāsu jātīsu、惟。「於一切處」に対し、Tib. thabs cig bshugs kyaṅ とあり、sārdhaṃ pi jātīsu とでもあったか。sarvāsu jātīsu を維摩は gatīṣu sarvāsu、芽。「諸趣」とする。什。「諸法」によれば、岩松氏のご指摘のように、dharmeṣu sarvāsu とでもあったものであろうか。

vimukta- の智光明のチベット訳は、rab tu dben gyur pa とあり、vivikta- の可能性もある。また、智光明 3a の｛gatīṣu｝を 3c につけ、jātīsu を省けば維摩と同じになる。

3c　智光明の jaleruhaṃ は、校訂本では、jale ruhaṃ と切り離したが、維摩にならい、jaleruhaṃ と合成語に訂正する。智光明の salilair の Tib. は chab kyis とあり、問題はないが、惟。「於水中」は、loc. のようであり、維摩と同じように salile とあったかも知れない。維摩の Tib. chu skyes chu yis yoṅ「水に生じながら、水によっても」は、loc. と instr. に巧みに訳している。什。「不著世間」の世間は意訳か。

3d　智光明の munir buddha は写本のままに、munir buddha としたが、明らかなミスであり、muni buddha と訂正する。その場合、muni は voc. sg.m. に読む。Edg.Grammar10-36 によれば、-ir の形で voc. もあるが、hiatus を避けるために使われる。ましてここは短母音が来なければならず、校訂者の間違いである。ただ、munibuddha と合成語にすることも可能である。維摩は munipadma と「蓮花にも譬うべき清浄なる牟尼」とする。

4

vivekatā śāstṛpadaṃ niruttaraṃ
　vande nirālamba mahaughatīrṇam /
vibhāvitā sarvanimitta sarvaśo
　na te kahiṃcit praṇidhā<u>nu</u> vidyate // §38-4 //

vibhāvitā sarvanimitta sarvaśo
　na te kahiṃcit praṇidhā<u>na</u> vidyate /
acintiyaṃ buddha mahānubhāvaṃ
　<u>vande ’ham</u> ākāśasamam aniśritam // I-§10-15 //

師の足跡は無上にして空寂なり、無所縁にして
大激流を渡ったお方に頂礼いたします（空）

あらゆるとらわれをすべて離れた（無相）
あなたには、いかなるものも求めることがありません（無願）

あらゆる特徴が遍く除滅している（無相）。

〔そういう〕あなたには何処にも願うものはない（無願）

聖師種種無上句　　稽首無縁度染海

普遍善觀諸相門　　於諸願求無所有（惟淨）

聖師種種の無上句

無縁にして染海を度れるに稽首す

普遍に諸相の門を善觀す

諸の願求に於て所有無し

/ mtshan ma thams cad rnam pa kun tu rnam par bśig /

/ khyod la gar yaṅ smon par mdsad pa mchis ma lags /

/ ston pa’i go ’phaṅ bla med dben pa ñid lags te /

/ dmigs med chu bo rgal ba khyod la phyag ’tshal lo // 4 //

すべてのあらわれた特質をあらゆる種類にわたって絶滅した、
あなたはどこにも願求するものがない。

教主（たるあなた）の足跡は無上でひとり離れ

知覚すべきものはない。流れを渡れるものよ、

あなたに帰命する。（高崎訳）

不可思議にして、大威神力を有し、
虚空にも等しく、

依り所をもたない仏陀に私は頂礼いたします（空）

達諸法相無罣礙　稽首如空無所依 (羅什)

諸の法相に達して、罣礙無し

空の如く所依無きを稽首す

一切相遣無所遣　一切願滿無所願

大威神力不思議　稽首如空無所住（玄奘）

一切の相は遣り、所遣なし

一切の願は満ち、所願なし

大威神力、不思議なり

空の如く無所住なるに稽首す

/ mtshan ma thams cad rnam pa kun tu rab tu gsal /

/ khyod ni ci la’ṅ smon par mdsad pa yod mi mṅa’ /

/ saṅs rgyas dag gi mthu chen bsam gyis mi kyab ste /

/ nam mkha’ lta bur mi gnas pa la bdag phyag ’tshal // 15 //

一切の相は遮遣し尽くし、請願は満ちて

さらに顕宗することのない　汝

不可思議であって、　虚空のごとく不住である

諸仏の大威神力に　帰依したてまつる（大鹿訳）

5

acintiyaṃ buddha mahānubhāvaṃ

vandāmi ākāśasamam aniśritam /

vandāmi te sarvaguṇāgradhāri

vandāmi tvāṃ merum ivodgataśriyam // §38-5 //

不可思議にして、大威神力あり、虚空に等しく

拠り所無き佛陀に帰命し奉る（空）

一切の功徳の最勝を持つ方よ、あなたに帰命し奉る

吉祥あらかたなる須彌山の如きあなたに帰命し奉る

佛大威力不思議　猶如虚空無依止

稽首廣持勝德門　稽首猶如妙高勝（惟淨）

佛の大威力は不思議にして　猶し虚空の依止無きが如し

廣く勝德門を持せるに稽首す　猶し妙高の勝れたるが如きに稽首す

/ saṅs rgyas mthu chen bsam gyis khyab pa ma lags te /

/ ni gnas nam mkha' mñam pa ñid la phyag 'tshal lo /

/ yon tan kuṇ gyi mchog mṅa' khyod la phyag 'tshal lo /

/ dpal 'phags lhun po 'dra ba khyod la phyag 'tshal lo // 5 //

大威力あり不可思議なる仏、

虚空のごとくよりどころをもたぬ仏に帰命する。

一切の徳の最勝者よ、あなたに帰命する。

吉祥にして聖なる、スメールの山のごときあなたに帰命する。（高崎訳）

【註記】智光明二偈（4cd, 5ab：Tib.4ab, 5ab）を二つにわけて、維摩は一偈とする。維摩の一偈について記す。

4a　vibhāvitā は写本には vibhāvitāḥ とあるが、智光明にならって vibhāvitā としたが、岩松氏のご指摘の通り写本のままに、vibhāvitāḥ とす

る。その場合 sarvanimitta は、nom.pl.m. である。智光明も訂正したい。什。は一句目 4a と四句目 4d のみの訳文を残す。

4b 維摩 praṇidhāna、智光明 praṇidhānu は、どちらも nom.sg.n. である。

4cd 維摩の buddhamahānubhāvaṃ は Tib. saṅs rgyas dag gi mthu chen に基づいて合成語にしたが、智光明は buddha mahānubhāvaṃ と分書した。buddha は動詞 vande 、智光明は vandāmi の目的語にとるのが一番素直で、岩松氏のご指摘の通り切り離して、buddha mahānubhāvaṃ とする。

維摩の四偈と智光明の五偈を対照した結果、どちらが先か明確には区別がつかず、共通して維持され膾炙されていたものとおもわれるが、智光明が維摩の偈を参照した印象が否めない。維摩の 4 偈目を智光明は二偈にしているが、これも維摩は三解脱門を顕しているのは明白で、引き締まっており、智光明は増広の感がある。但し、「維摩経」の支謙訳にはなく、ラモットは「最古の支謙訳にないものは原本になかったのではないか」との見解を示している。（ E ’Lamotte, *L ’Enseignement de Vimalakīrti* Louvain, 1962 及びその英訳 Sara Boin, *The Teaching of Vimalakīrti* P.T.S., 1976, p.11, note, 51.）

引用書目

大正大学綜合仏教研究所、2006、『梵文維摩経—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂—』、東京：大正大学出版会。

大鹿実秋、1988、『維摩経の研究』、京都：平楽寺書店。

木村高尉・高橋尚夫・木村秀明・大塚伸夫、2004、「梵文校訂『智光明荘厳経』」、『小野塚幾澄博士古稀記念論文集』、東京：ノンブル社、頁 1-90。

岩松淺夫、2007、「梵文維摩経偈頌攷正（1）」、『創価大学人文論集』19、頁 67-119。

高崎直道、1975、『如来蔵系経典』（大乗仏典 12）、東京：中央公論社。

Lamotte,Étienne, 1962, *L'Enseignement de Vimalakīrti*, Louvain Publications unive

NTU Digital Library of Buddhist Studies

NTU Digital Library of Buddhist Studies
國立臺灣大學佛學數位圖書館
NTU Digital Library of Buddhist Studies